

まだまだ進歩する白内障手術

町田市民病院 眼科部長
医師 保坂 大輔

白内障は高齢者の視力低下の主な原因疾患で、治療は手術が行われる。白内障手術は、年間約 130 万件行われており、広く普及した治療法である。短時間の手術で、日帰り手術も多く行われているなど、安全で負担の少ない手術である。

手術を行う時期は、日常生活において白内障に起因する見づらさを自覚するようになった時であり、不自由がない段階で手術を急ぐ必要はない。しかし進行するまで放置すると手術が難しくなるため、適切な時期に手術を受けることが重要である。

白内障手術は技術の進歩が目覚ましく、手術侵襲の軽減、高機能の眼内レンズの使用などにより、合併症も減り術後早期からのよりよい視力改善が可能になった。また以前は負担の大きな手術が必要であった進行した白内障に対しても、通常行う超音波手術が可能となり、術後の経過をより良くすることが可能となった。

白内障手術の進歩には大きく下記の二つがある。

●手術機器の進化

白内障手術では混濁した水晶体を吸引するための超音波装置が必要で、その機能向上により、より低い吸引圧でも安定した吸引が可能となった。それにより眼内での水流が少なくなり、眼への負担の少ない手術が可能となった。また超音波の発振方法の進化により発生する熱が少なくなったことで、より進行した白内障でも超音波での手術が可能となった。

●眼内レンズの進化

白内障手術では、吸引除去した水晶体の代わりに眼内レンズを挿入する。眼内レンズにも様々な付加機能があるものが登場し、術後の視機能を更によいものに出来る様になった。またより小さな切開から挿入できるレンズが開発され、2mm 前後の切開からの手術も可能となった。

高機能眼内レンズには以下のようなものがある。

着色眼内レンズ：うすい黄色に着色することでまぶしさや色感覚の変化（青っぽく見える）を軽減できる。また短波長光による網膜光障害の予防にもつながると考えられている。

多焦点眼内レンズ：通常使用されるレンズは単焦点眼内レンズ（ある距離にしかピントは合わない）であるが、多焦点眼内レンズを使用すると遠方近方

とも眼鏡なしで見ることが出来る。ただ中間距離にはピントは合わず、にじむような違和感を感じる人もいる。保険適応ではない為自己負担が高額であり、期待が大きすぎると術後に不満を残すことがある。適応は主治医とよく相談の上決める必要がある。

乱視矯正眼内レンズ： 眼内レンズでの乱視矯正が可能となった。手術時に使用することで、術後裸眼での見え方が向上する。乱視が強い方に使用する。